



TITLE:

風と生きる

AUTHOR(S):

明和, 政子

CITATION:

明和, 政子. 風と生きる. 教育方法の探究 2013, 16: i-i

ISSUE DATE:

2013-03-31

URL:

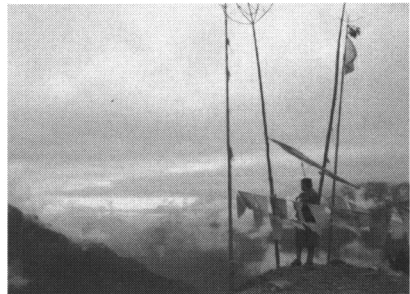
<https://doi.org/10.14989/190407>

RIGHT:

風と生きる

毎年、ブータンという国に行っている。個という存在が、厳しい自然環境と社会文化的な制約のなかでどのように育まれ、位置づけられていくのかを自分の目で見たい、鳥瞰的な視点で整理したいという動機が理由だ。

ブータンに行くとまず目にとまるのが、あちこちの山々のすそ野、中腹に高くそびえるポールと、風にたなびく白あるいは自然界の五大要素が象徴された5種に彩られた小旗だ。ヒマラヤからの強風を受けながら、多数の小旗がぱたぱたと音をともないこちらに迫ってくる光景は圧巻だ（下写真）。それぞれの旗には経典が細かな文字で書かれている。チベット仏教への信仰、教えが、風にのってどこまでも遠くに伝わっていくのだという。また、ブータンには、個人あるいは家系につながるお墓がない。遺灰は山路の脇に壺のようなものに入れられて無造作に置かれている。輪廻転生を信じる人々にとって、死は次の展開の過程にすぎない。お墓という形式は、あまり意味をもたないようだ。壺に入った遺灰は風雨にさらされ、人間の生を支える自然の舞台へと溶け込んでいく。



日本の高等教育、学術の場にも、ブータンの風に負けないほどの強風が吹きすさんでいる。施策、政策という人工風だ。すでに風のレベルを超え、嵐というべきだろうか。国際競争、最先端、新改革、高度な人材の育成。避けることができない、受け止めることを前提とする風。ブータンの人々のように、風を流しつつ生きるという選択は、もはや私たちにはできそうもない。風を受け止め、さらにはそれを追い風として生かすにはどうしたらよいか。これが今の時代の研究者に課せられている課題なのだが、気になることもある。風を受ける、生かす方法ばかりに気をとられていると、風に飲み込まれ、終には何も残らなくなる事態に陥ったりはしないだろうか。誰のために、何のために学術探求を目指すべきかという基本的視点だけは簡単に流されてはいけない。ブータンの強風に負けずに凜とそびえ立つ、ポールのように。次世代の学術、人間形成を支えるもっとも重要な営み、「教育」とは何かを多角的な視点で検証し、現場に生かすべき価値ある方法論の探求。その先には、日本の、そして人類の存続がかかっている。

平成 25 年 春
教育方法学講座（発達教育分野）准教授
明和政子